

「心の中に仏陀がいる」高橋尚夫先生 『維摩経』サンスクリット語版との不思議な出会い

「初めて佛光山を訪ねましたが、学術の力に驚かされました」。高橋尚夫・大正大学特任教授は「『維摩経』と東アジア文化」に関する学術研究会でその驚きを語った。

日本の真言宗伝道師である高橋尚夫氏は『維摩経』との不思議な出会いについて話した。1999年、チベットのポタラ宮で文献を調査していたとき、『智光明莊嚴経』と書かれていた経函があった。その中の貝葉経を一ページずつ開いて仔細に見ると、意外にもそれは目録ではなくサンスクリット語の『維摩経』だった。その瞬間、氏は鼓動が高鳴り、比類のないほどの喜びに気持ちが奮い立った。氏は謙虚に「私の発見は全くの偶然である」と思った。サンスクリット語、日本語、英語、チベット語などの言語が得意で、各言語版と照らし合わせることで、仏教の学術研究の命運に貢献するため、一個人の力を捧げたのだった。



サンスクリット語の『維摩経』を発見した後、高橋尚夫氏はこの經典の研究を始めた。今後も漢文の経本を主に、サンスクリット語、日本語、英語、チベット語版と研究を進めていきたいとしている。

「心の中に仏陀がいる、自身は仏陀と成る」というのが真言宗の思想である。その両者共『維摩経』の研究で見出される空の思想である。高橋氏は仏陀を信じ、仏陀を見、心の中に煩惱がなくなれば、仏陀は心の中に自然と現れると表明した。

代々の名門寺院に生まれた高橋尚夫氏は、現代仏教学の研究者であると共に、大王寺の住職でもある。「大王」は円満という意味で、人々が平等な心を生活の規範にすることを希望している。佛光山創建開山・星雲法師の講演を聞いた後、高橋氏は喜びを表した。人々に仏教の啓発をもたらし、その精華を普及させ、日本仏教を広めたいと語った。今回、氏は日本の仏教を自らも省み、新しい物事を学ぶ必要があると感じた。

「笑うべき時は笑い、言うべき時は言い、やるべき時は必ずやる」ということばを、高橋氏は大師の法語『人生ト事』から引用したとき、人々は皆、それが氏に当てはまると言った。一般の人にとってそのことばは自らを磨く座右の銘である。しかし、仏陀との縁が非常に深い氏にとっては意識せずともその通りであり、どんな所へ行っても「心の中に仏陀がいる」という心境なのである。

「未来のことは分からない」と、高橋氏は微笑みながら未来への期待について話した。将来は佛光山と仏陀記念館を縁に、信者達が仏法修持過程に進んでいくだろうと氏述べた。そして、氏は腕白な子どものように、「私たちが佛光山は歓迎してくれますか」と聞きました。その時、皆は笑顔で氏の問いに応じ、高橋氏も満面の笑顔で未来への期待を示した。